川上 高司 ブログ アーカイヴ

2018年

3月14日

さまよえるアメリカ外交政策

トランプ大統領は 13 日午前 9 時、テラーソン国務長官を解任すると発表した。テラーソン国務長官は同日午前 4 時、アフリカ訪問の行程を短縮してワシントンに戻ってきたばかりだった。おそらくテラーソンはそのタイミングで解任されるとは思っていなかっただろう。解任の理由もつげられていないに違いない。後任にはマイク・ポンペオ CIA 長官が指名された。ポンペオはトランプと近い親イスラエル。イランに対しては厳しい。当面、北朝鮮には宥和的に接し、イランには厳しくすることになるだろう。

昨年末には年明けにテラーソン長官が辞任するとの噂がメディア上に飛び交い、後任にはポンペオが就任すると報じられた。その時はトランプ大統領は「フェイクニュースだ」とメディアを非難し、テラーソン長官も 2018 年いっぱいは長官に留まるとコメントした。しかし、トランプ大統領にとってはすでに腹は決まっていたのだろう。

テラーソン長官とトランプ大統領の不仲は今に始まったことではない。テラーソン国務長官はパリ協定からの離脱やイランの核合意の破棄に反対していた。エルサレム移転問題でも意見を異にしていたが沈黙を守った。トランプ大統領の外交政策は混乱している中東情勢をますます不安定にするだけで、安定にはほど遠い。

シリア内戦は３月１５日に７年目を迎え一向に終わりが見えない。もはやアメリカ史上最も長い戦争となったイラク戦争に迫る勢いである。この間アサド大統領は権力の座に留まる一方、アメリカの国務長官は、クリントン、ケリー、テラーソンと続き、ポンペオが４人目となる。彼らが心血を注いできても解決しないほど中東情勢は複雑で難しいのである。

現実主義で理性派のテラーソンが去ることでアメリカの外交政策がどこへ向かっていくのかもはや誰にも予測できなくなっている。マティス国防長官、ケリー補佐官やマックマスター補佐官は残っているが、彼らといえどもいつ政権を去るかわからない。

実のところ、テラーソン解任の前にはトランプ大統領の国家経済会議の委員長であったグレイ・コーンが辞任を表明している。トランプ大統領の保護貿易主義に真っ向から反対してアメリカの自由貿易を守ろうとしてきたコーンだったが、トランプ大統領の鉄鋼とアルミニウムの輸入制限をかけるという決定に嫌気がさしたようである。

このようにトランプ政権では理性派で現実主義的な閣僚が次々と政権を去って行く。後任はトランプ大統領に忠実でイエスマンばかりとなる。アメリカがどこへ向かっているのか、おそらくトランプ大統領自身にもわかっていないに違いない。世界にとってアメリカが「最大の脅威」となりつつある。

3月24日

最後の頼みの綱となたマティス国防長官ータカ派のポンペオ国務長官、ボルトン大統領補佐官の就任で先制攻撃になるか

今、ワシントンで政府関係者やシンクタンクへの取材を重ねているが、その最中にテラーソン国務長官が解任された。そのニュースは衝撃的でアメリカの外交政策が強硬路線に向かう可能性が高まる中、追い打ちをかけるように今度はマックマスター大統領安全保障担当補佐官が解任された。マックマスター補佐官は、マティス国防長官、テラーソン国務長官らとともにアメリカの外交政策の軌道を穏健路線に保っていた。イランとの協調路線を取るテラーソン国務長官が解任されて後任にはポンペオ、次はマックマスター補佐官が解任された後任には強硬派のジョン・ボルトンが指名された。

ジョン・ボルトンはブッシュ政権時代に国連大使を務め、イラクへ侵攻しフセインの打倒とイランの核開発疑惑に対してイランへの攻撃をかたくなに主張した、筋金入りのタカ派である。その主張は今も変わらず、イランとの歴史的な合意を認めず軍事的手段でしかイランの核開発は止められないと考えている。ネオコンのボルトンにとってイランは攻撃対象でしかない。さらに、ブッシュ政権時代にボルトンはイラクとならび北朝鮮を「悪の枢軸」と呼んだ。ボルトンの就任で北朝鮮への先制攻撃の可能性も高まった。

国務長官候補のポンペオもタカ派であり、トランプ政権の国家安全保障会議は勢力図が大きく変わることになる。今後はテラーソンやマックマスターとタッグを組んでいたマティス国防長官がタカ派に包囲されて孤立することになるのである。

ワシントン政治の常識やバランスのとれた政策を目指すマティスが押さえ込まれ、ようやく秩序を取り戻した外交政策が再び混迷する可能性はますます高まる。国防長官の下には巨大な米軍が控えているとはいえマティス国防長官の身も安泰ではない。トランプ大統領が軍の最高司令官なのである。号令ひとつで戦争を始めることもできるのである。ブッシュ政権時代イラン攻撃の危険性が高まったとき、軍の高官たちがこぞって「イラン攻撃の命令を受けたら辞任する」と自らのクビをかけて阻止に動き、国防長官の説得もあって攻撃を回避することに成功した。しかし聞く耳をもたないトランプ大統領にその手法はおそらく通じないであろう。誰が辞任しようが攻撃すると決めたら突っ走るのみである。

アメリカだけでなく世界にとっても今や頼みの綱はマテイス国防長官だけなのである。